

安心して最期のケアをしてあげたい！

エンゼルケアの コミュニケーション

患者さんに看護師として行う最期のケアともいえる「エンゼルケア」は、ご本人にとって、ご家族に対してとても配慮が必要となる大切な行為です。

ご家族とのささいな行き違いからトラブルになることもあるので、エンゼルケアのコミュニケーション能力を高め、安心して最期のケアを行いませんか？

エンゼルメイク

亡くなったその人らしい容ぼう・装いに整えるケア全般のこと。つまり、身だしなみの整えのこと。保清や臭気対策、更衣、顔のメイクなど。

エンゼルケア

エンゼルメイク、創部への処置、家族への対応など、担当している間のすべての死後ケアのこと。

エンゼルメイクは亡くなった人と向き合う最期の場面として考えてほしい

エンゼルケアの場面では、声掛けをする、説明をする、質問に答える、相談をするなどといった面と向かって会話をするコミュニケーションだけではなく、

エンゼルメイクを、

- ・ご家族にそばでよくご覧いただきながらぼつりぼつり会話をする
- ・会話をせずに静かななかご家族にご覧いただく
- ・看護師とご家族と一緒にに行いながら言葉を交わす、あるいは言葉を交わさずに行う
- ・ご家族が中心となって実施するのを無言で見守る、あるいはご家族の話に耳を傾ける

など、

言葉のみのコミュニケーションではない看取りの場面として考えてみて欲しいと思います。亡くなった方を、そしてその看取りの場面を大切に思っていることを言外に伝える意識をします。

また、ご家族や縁者の方々にとってエンゼルメイクは、心の中で、あるいは声にして話し掛けたりするなど、亡くなった人と直接向き合う手段になることも忘れずに接します。

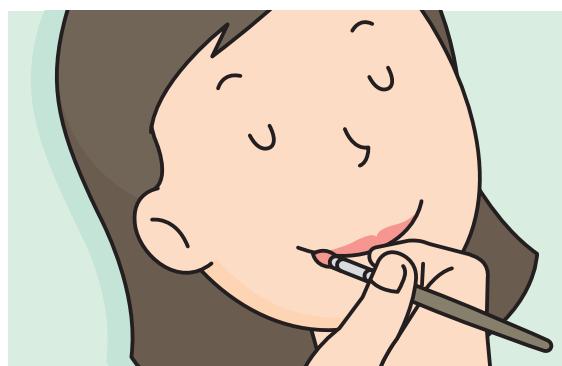
エンゼルメイクは看取りの一場面であり看取りの手段にもなります

口紅をつける、シャンプーをする、衣類のボタンをかける、ネクタイをしめる、靴下をはかせる、マニキュアをつけるなど、さまざまなエンゼルメイクが看取りの場面となり看取りの手段にもなりますが、そのうちの三つを次に紹介します。

顔のクレンジング・マッサージ

重力の影響を受けて顔の平坦化が進む時間帯に、クレンジング・マッサージを行うことで、汚れがよくとれると同時にみるみるうちに穏やかな表情になります。それを間近でご覧いただくと、ご家族は「これでよかったんだ」「穏やかな顔になってくれた」などといった言葉とともに安らかな表情になることが多いです。

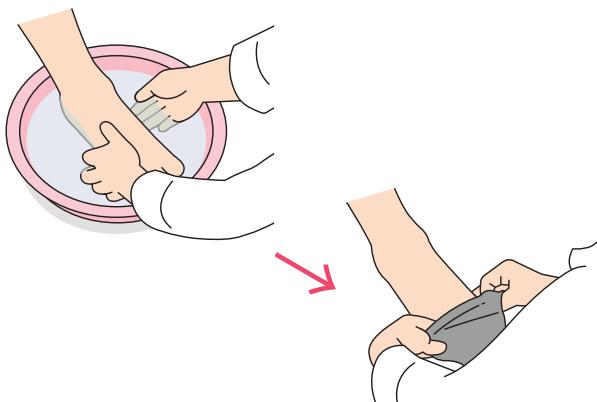
亡くなった妻の顔のクレンジング・マッサージを、顔を近づけ時間をかけて自分の手で行った男性もいらっしゃいました。



手・浴・足・浴

シャワー浴の実施は難しく、ベッド上清拭を行う場合、お湯に手や足をつけて洗うことも大変貴重な看取りの一場面です。洗う作業をご家族の手で行っていただくと、「まさか、自分の手で洗ってあげられるとは思わなかった」といった言葉が聞かれ、洗った感触とともにプラスの記憶として残ることでしょう。「あのとき、父の足を洗ってあげることができてよかった」と何年たっても担当看護師に語るご家族もいらっしゃいます。

手や足をお湯で温めても、腐敗を助長することにはなりません。循環がないため腐敗が始まり進行する体幹部分にお湯の熱が伝わりにくいからです。



爪切り

ある高齢男性Aさんが亡くなった際、担当看護師は病室の隅で直立している長男にAさんの足の爪切りをお願いしました。

最初はためらっていた長男さんでしたが、はじめてから少しすると爪を切りながらAさんの脛をさすり、さらに爪を切りながらAさんの脛に何かを話しかけていたというエピソードがあります。



コミュニケーションの充実に向けて知っておきたいこと①

多くのご家族は、生きているときと同様にご遺体を気遣うということ

ご家族のご意向やご希望はそれぞれに異なったり、時間の経過とともにご希望や考えが変化したりもしますが、そのどなたにも「ご遺体を生きているときと同様に気遣う」感覚が共通してある印象です。死亡宣告を受けて頭では死亡の事実は分かっていても、心をすぐに切り替えられないことは想像に難くないでしょう。以下に実際にあった例を挙げますので、ぜひ含んでおいてください。

「痛み止めをお願いしたい」

亡くなる前に痛み止めを使用していた方が少なくありません。「もしかして痛いかもしれない」「まだ痛いのではないか」と思い、担当看護師に痛み止めを希望するご家族がいらっしゃいます。



「死者らしくしたくない」

従来の死後処置の対応では、四角い白い布を顔に掛けたり、手を腹上で組ませたりする慣わしを行うことが定番でした。この慣わしは、亡くなった人であるとの印づけでもあります。ある男性が亡くなり、エンゼルメイク時に妻に「手はお腹の上で組ませますか?」と伺ったところ、「そんなことしないでこれまで通りにして。夫は今心臓が止まっただけですから」という言葉が返ってきたそうです。

「口は閉じなくていい」

口を開いたまま亡くなった場合、従来はその口を閉じることが当然だとして対応してきたのではないでしょうか。しかし、閉じなくていいと考えるご家族が少なからずいらっしゃいます。あるご家族は「亡くなったときに口が開いていたら、本人はそれが楽なのかもしれないから無理に閉じなくていい」とお話しになったそうです。



アドバイザー

小林光恵(こばやし みつえ)

エンゼルメイク研究会代表

1960年 茨城県行方市生まれ

東京警察病院看護専門学校卒業後、看護師として東京警察病院、茨城県赤十字血液センターなどに勤務のち、出版関係専門学校を経て編集者として各出版社に勤務。1991年に独立し、執筆の仕事が中心となる。「おたんこナース」「ナースマン」など。

看護に美容ケアをいかす会代表